

I 普及活動実績

1 留萌振興局管内における普及活動の動向

本所（羽幌町）は苫前町から天塩町まで4町1村、南支所（留萌市）は増毛町から小平町の1市2町を担当区域としている。留萌管内は南北に長く、南部～中部では稲作、畑作、野菜、果樹、花き、酪農、肉用牛、北部では酪農業を中心に営農が行われている。

管内の耕地面積22,866ha、農家戸数744戸、農業就業人口1,368人（2020農林業センサス）と経営規模は道内では平均的であるが、多様な農業経営が展開されている。

管内の農業は、地域の高齢化・農業人口減少を背景に、担い手・労働力の不足は深刻で、新規就農者や参入者の確保・育成など早急な対策が求められており、また、農地維持や規模拡大のため、農作業の省力化、新たな栽培体系の導入、スマート農業の推進、受委託組織の育成などが必要である。

そこで「ゼロカーボン北海道」の実現に向け、農家、関係機関と連携を強め省力化技術の導入や環境負荷を抑えた栽培方法の推進を進めた。

酪農地帯である留萌北部では、サイレージ調整技術の向上による自給飼料の品質向上と飼養管理改善、畜産クラスター事業等による大型協業法人・TMRセンター運営支援や省力化機械導入による生産性の向上に取り組んだ。

耕種農家が多い留萌中南部では、基幹作物の水稻や小麦等の生産技術、低コスト・省力化を図る革新技術の導入により、安全・安心で良質な食料生産の効率化に向け活動を展開した。

令和5年の管内の農業は、春先から好天となり作業は順調に進んだ。6月以降は平年を上回る気温で推移し、過去に例の無い暑い夏となった。米は作況指数「105」ではあったものの、度重なる強風、豪雨等により倒伏するなど、製品収量は平年並み、蛋白は高い傾向となった。畑作物・野菜・果樹・飼料作物の収量も高温の影響と病害虫の発生もあり、平年並から平年を下回った。畜種では飼料価格等の高騰に加え、夏の暑さにより乳量が低下するなど、特に大型経営において、収益が大幅に低下している。

(1) 普及活動の基本的な取り組み

- ア 持続可能で生産性の高い農業・農村の確立
- イ 国内外の需要を取り込む農業・農村の確立
- ウ 多様な人材が活躍する農業・農村の確立
- エ 道民の深い理解で支え合う農業・農村の確立

(2) 普及活動の重点化と提案型の普及活動

地域係は2つの重点課題と4つの地域課題を設定、重点課題（羽幌町、増毛町）は対象農家と合意のもと、関係機関と役割分担を明確にし、改善策の提案や現地実証を実施した。

広域班は、地域係・振興局と連携し、12の推進事項に取り組んだ。

地域活動や要請についても、きめ細やかな現地対応と迅速な情報提供を行った。

活動に当たっては農家の所得向上と地域への波及を考え、優先度の高い課題から取り組み、結果をもとにさらなる提案を行い、農家が自ら取り組むように普及活動を展開した。

【重点的に実践した内容】

- ゆとりある豊かな地域農業の確立（羽幌町）
- 次代を担う水稻を基幹とした地域農業の確立（増毛町）

【プロジェクト課題】

- 留萌管内におけるスマート農業技術導入の現状と課題
～スマート農業の導入状況や効果を理解し、技術の普及にむけた情報蓄積をすすめる～
- 水田活用の直接支払い交付金制度に対応する水田営農の検討

(3) 具体的な活動内容

ア 持続可能で生産性の高い農業・農村の確立

(ア) スマート農業導入への支援

苫前町や羽幌町で基地局が設置され、またハウス自動換気装置も多数導入されるなどスマート農業の導入が進んできた。

水稲においてはドローンによる本田防除が実践され、酪農ではつなぎ牛舎用の搾乳ロボットが導入されるなど、スマート農業に対する気運は少しずつではあるが、盛り上がってきた。



写真 つなぎ牛舎用搾乳ロボット

(イ) 基盤整備後農産物の安定生産

農業試験場の協力を得て、作期中の土壌分析の結果を基に施肥方法の改善等を提案した。実施農家では、前年を上回る収量となった。

(ウ) 稲作

留萌管内のうるち米は低タンパク良食味であるが、労働力不足や水張り面積の維持のため、省力化技術の導入が必要となってきた。ドローンの有効活用や直播栽培、高密度は種短期育苗栽培の導入に向け、現地研修会、実証ほの設置を進めた。

また、一部地区では特別栽培米を進めており、有利販売につながっている。

もち米では、日本最北のもち米団地であり「風の子もち」を中心に作付けされており、高い収量性を示している。一部で直播栽培の導入が見られる。



写真 ドローンによる湛水直播

(エ) 畑作

気象条件や土質等により小麦や豆類の収量は高いとは言えないため、増収を目指し、透排水性の改善、土壌pHの適正化、地域に適応した輪作や緑肥などを導入した土づくり推進や品種に応じた肥培管理や病虫害防除のタイムリーな情報提供に努め、生産技術の徹底を図った。

(オ) 園芸作物

メロン、ミニトマト、かぼちゃ、アスパラガス等の野菜は、生産組織と連携して収量・品質の向上を目指し、肥培管理技術の普及、省力技術の導入・開発など、野菜経営の安定化に向けて支援した。

また無加温ビニールハウスで行う冬期間の野菜栽培は7年目を迎え、農業試験場や技術普及室の支援も受け、一部の生産者が取り組んでいる。

(カ) 果樹

予察による病虫害防除、適切な栽培管理、果実分析による適期収穫について、タイムリーな情報提供を行い、高品質安定生産を支援した。おうとうでは、既存品種と比べて大玉で、果皮の着色が良く、果肉が硬く、食味に優れる新品種「陽まり」の普及推進を図った。



写真 おうとう新品種「陽まり」

りんご園の一部では、着果管理の省力化を図るために新たな摘花剤の導入がみられるた

め、効果的に使用するための情報収集を実施した。

(キ) 畜産・肉牛

多様な酪農経営スタイルでの安定経営を目指し、コントラクターやTMRセンター等の効果的な利用によるコスト低減、所得の向上に向けて支援したが、暑熱対策が不十分な牧場が多く、夏場の乳量低下の要因となった。

肉用牛（和牛繁殖経営）では、草地における難防除雑草の対策について支援した。

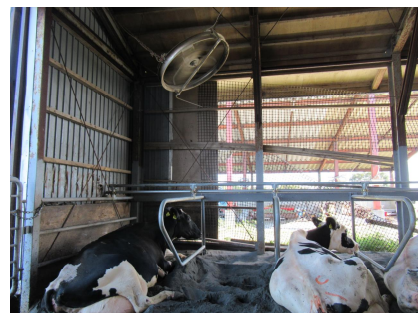


写真 牛舎に設置された送風機

(ク) GAP普及指導体制の構築

管内でのGAPの取り組みは見られないが、GAPへの理解と普及を図るために、管内の情報収集を実施した。遠別農業高校でASIAGAP認証再取得意向があり、昨年取得したASIAGAPのバージョン2.3（青果物2品目、穀物1品目）の更新のための支援を行った。



写真 農高のGAP取得支援

(ケ) 環境と調和した持続的農業の推進と防疫対策の推進

家畜排泄物の適正管理と近隣の耕種農家から排泄される麦稈の飼料化・敷わら等利用や残渣物の有効利用に向けて、畜種農家と耕種農家とのマッチングを行った。また、防疫対策として発生予防とまん延防止に向けて関係機関と連携して啓蒙活動を行った。

イ 多様な人材が活躍する農業・農村の確立

(7) 新規就農者の確保と育成

農業技術の習得と仲間づくりを目的に「るもい農業基礎ゼミナール」を本所・支所管内でそれぞれ開講している。各市町村等から対象者に呼びかけ、稲作・畑作・園芸・畜産（酪農、肉牛）の講座を年数回開講してきたが、対象者の減少により、令和5年度は本所管内の耕種コースのみの開講となった。

新規就農者の受入制度や研修制度の整備については、「るもい担い手対策推進会議」を開催し、JAや市町村、指導農業士、農業士等と連携し研修会の開催や情報を共有しながら取り組んだ。



写真 ゼミナール

(イ) 管内4Hクラブ・女性農業者グループの活動支援と農業高校との連携

各グループの運営に対するサポートや留萌管内の夏期冬期の研修や青年農業者会議（ファーマーズトーク in RUMOI）の開催支援を行った。

令和5年も地元農業高校との共同開催とし、北海道アグリネットワーク役員等を多数招いて2日間開催した所100名を超える出席があり、大いに盛り上がった。

1月に行われた全道青年農業者会議では、留萌4Hクラブ連絡協議会より2名が発表し2名とも入賞した。

全道発表では2年連続で発表者全員が入賞したことで、「来年は全国でも表彰を」という声が高まるなど、青年活動は大いに盛り上がりが出ている。



写真 ファーマーズトーク

(ウ) 農業法人の安定経営に向けた支援

既存の農地取得適格化法人は農地の受け皿、農外からの就農希望者の受け皿として期待されているが、情報交換できる場がほしいとの声が高まっていた。

令和3年度より研修会を通じネットワーク化を呼びかけ、地域の中心的な生産法人代表の理解を得、組織化を進めていたが、賛同を得ることができず、一部組織化に前向きな法人、町村から進めることに方針転換した。

本年の研修会では、先進的に法人組織化を行っている農協職員を講師に招き、他地域の取り組みについて講演を行った。

今後は定期的に研修会等を開催し、法人同士の情報交換の場としたい。



写真 法人研修会

ウ 国内外の需要を取り込む農業・農村の確立

(7) 地域特産品の開発や6次産業化への支援

加工・販売指向農家と地元の加工販売会社とのマッチング支援を行い、地域資源連携を進めた。

また、6次化を目指す農家に対して、他地区の事例や製造・加工方法、販売方法について情報提供を行った。また、6次化サポートセンター担当者等を招いての個別相談を行った。



写真 6次化の取り組みを支援

(4) クリーン農業の推進

「安全・安心」な食料生産に向け、適正な農薬使用に向け地域の防除ガイドの改訂や適正施肥を進め、環境負荷物質の削減を進めた。

Yes!cleanや特別栽培農産物生産の取り組みについて支援した。



写真 落花生を使った商品開発

エ 道民の深い理解で支え合う農業・農村の確立

(7) 留萌管内の生産、加工会社の連携

地元の加工会社のニーズを把握し、留萌管内の農畜産物の生産状況等の情報提供を行った。

地元の農業高校や加工会社と青年組織のコラボを進め、新たに取り組みを始めた落花生等を使った商品開発につなげた。



写真 小学生の農業体験支援

(4) 小学生等への食育支援

小学生等を対象にした田植え・収穫作業やばれいしょやさつまいもの植付・収穫作業などの農業体験を通して、地元農業への理解と「食」や「農」、「自然環境」などに触れる取り組みを農業者と連携して支援した。

令和 5 年度 普及活動実績 PR 版

ゆといある豊かな地域農業の確立

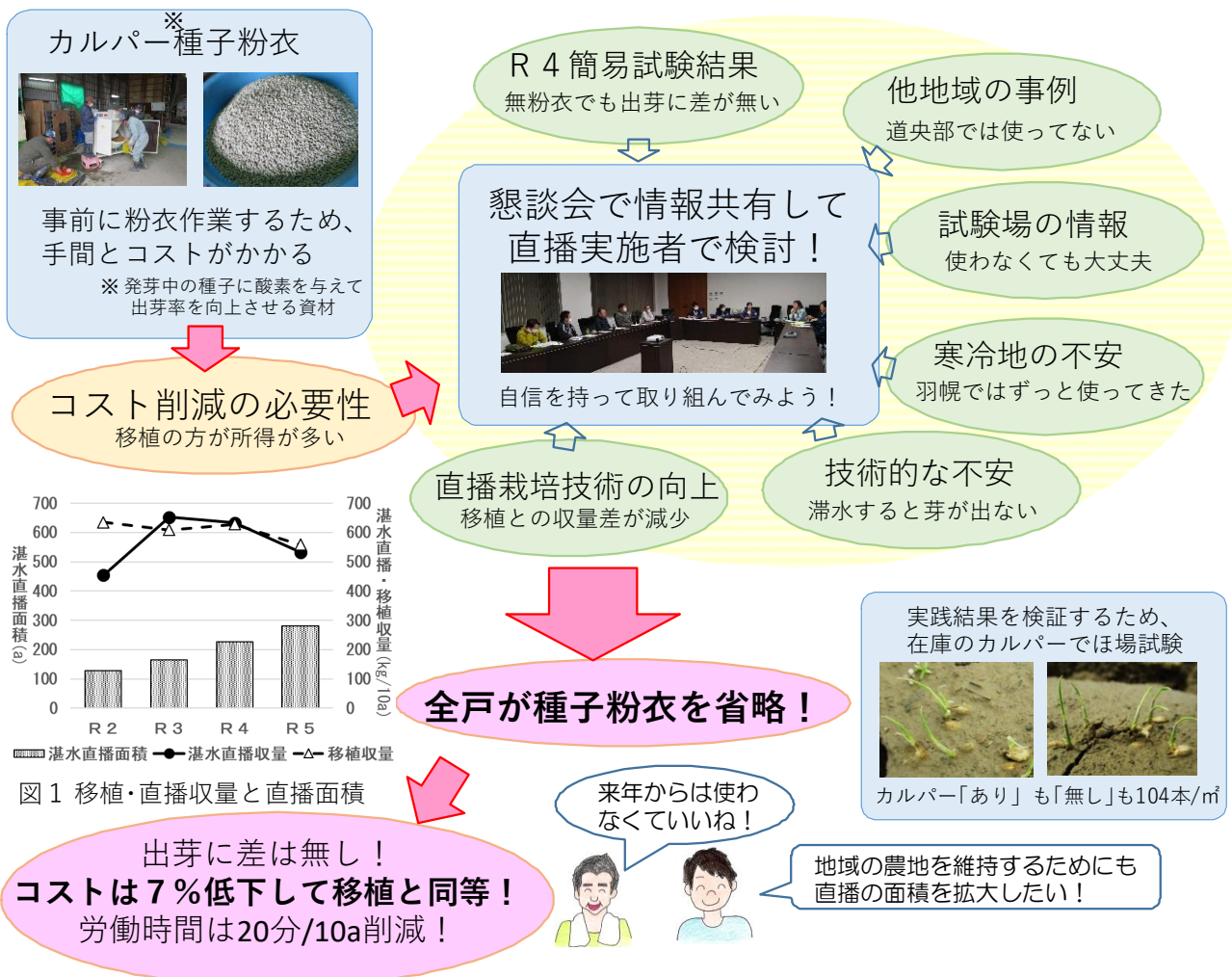
～ 水稲！ 畑作！ 機械！ コスト削減にチャレンジ ～ [本所地域係]

1 背景

- (1) 羽幌町築別2地域は水稲を中心とした経営で、1戸当たりの経営面積が35haと規模拡大が進み、さらなる規模拡大や親世代のリタイアに対する省力化等の対策が必要となっている。
- (2) 水稲は育苗面積に制約があることから、令和2年より湛水直播栽培に取り組んでいる。しかし、移植栽培より種苗や資材コストが高い問題点がある。
- (3) 畑作は緑肥栽培や堆肥導入を実践し、土作りによる安定生産を目指しているが、肥料高騰に対する収益確保が課題となっている。
- (4) 機械コスト低減に向けて共同所有や共同作業を提案したが、地域の同意が得られなかったため、令和3年度から個人所有機械の共同利用を推進した。

2 取り組みと活動の成果

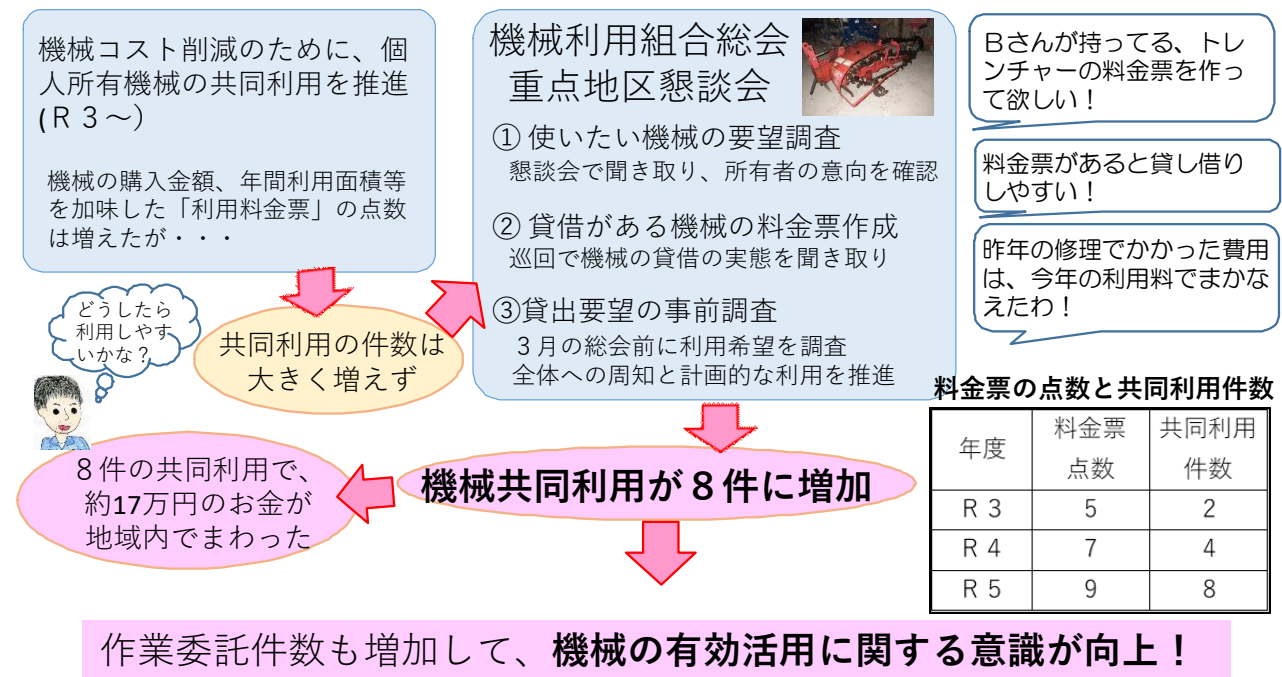
(1) カルパー粉衣省略で、湛水直播栽培のコスト削減！



(2) 土壌診断結果に基づく施肥によるコスト削減！



(3) 個人機械の共同利用で地域のお金をまわす！



3 今後の活動

- (1) さらなる省力化と所有機械の有効活用に向けて、ドローンによる湛水直播および乾田直播の実践を支援する。
- (2) 土づくりや土壌分析について、農家が主体的に取り組めるように支援を行ない、畑作物や緑肥に対する農業者の興味を引き出しながら導入品目検討を共に行う。
- (3) 機械共同利用および農作業受委託の拡大を推進する。

次代を担う水稲を基幹とした地域農業の確立

～ 増毛町の特別なお米を苺取り、将来にわたって皆様に届けます～

留萌農業改良普及センター南留萌支所

○活動期間 令和3～7年度

○対象地域 増毛町別荘（10戸）

1 背景

① 水稲生産技術支援

（土壌診断結果に基づいた施肥管理）

② 地域農業を考える会

（労働軽減対策の実践）



- 基盤整備後の施肥管理と土づくり、どうしたらいいのか…
- 水田面積が増え続けると移植栽培だけでは限界がある…

2 取り組み

(1) 「水稲安定生産技術の確立」

～土壌診断結果に基づいた施肥管理



写真1 施肥面談の様子



写真2 土壌診断現地研修会の様子

主な取組：土壌分析に基づいた施肥面談
アンモニア態窒素分析結果報告及び追肥の検討
現地研修会（土壌断面と土壌改良）

(2) 「地域農業を考える会の活動支援」

～労働軽減対策の実践



写真3 労働軽減対策実践に向けた助言



写真4 ドローンによる水稲直播実演会

主な取組：労働軽減対策実践に向けた助言
労働軽減対策実演会（ドローンによる水稲直播）
別荘クラブ開催

3 成果

(1) 水稲安定生産技術の確立

～土壌診断結果に基づいた施肥管理

表1 施肥管理の実施状況

農家名	作付け前		6月下旬	
	土壌分析	適正施肥	土壌分析	適正施肥
A	○	○	○	○
B			○	○
C	○	○	○	○
D	○	○	○	○
E	○	○	○	○
F	○	○	○	○
G	○	○	○	○
H			○	○
I			○	○

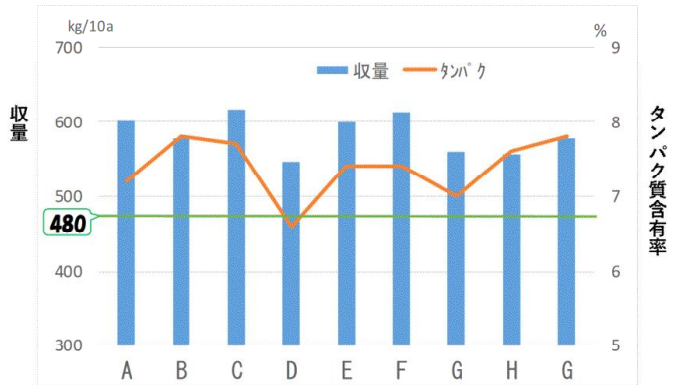


図1 R5年産水稲収量とタンパク質含有率

全戸で施肥管理を実施
＝施肥管理への意識の高まり

- ・初期生育向上技術の実践（R3）
 - ・病害虫発生予察に基づく防除（R4）
 - ・土壌診断に基づく施肥管理（R5）
- により、全戸が目標収量を達成

(2) 「地域農業を考える会の活動支援」

労働軽減対策の実践



写真5 別荘クラブ開催風景

表2 労働軽減対策の実践内容

使用 機器	ドローン				無人 ヘリ	-	ボート
	は種	防除	除草剤	追肥	追肥	水口 施用 追肥	除草剤
農家名							
A		○	○	○			
B							○
C	●				○	○	
D		●	●				

●:R4から実施 ○:R5から実施

水田面積維持に向けて、ドローンの利用をはじめとした
労働軽減対策への関心が地域で高まっている

4 今後の対応

(1) 水稲安定生産技術の確立

- ・省力化技術である直播栽培への取組

(2) 地域を考える会（別荘クラブ）の活動支援

- ・労働軽減対策の定着



写真6 懇談会風景